

「第16回北東アジア経済フォーラムイン 北陸」報告

ERINA調査研究部長 中村俊彦

2007年10月25 - 26日、富山国際会議場（富山市）で、16回目を数える北東アジア経済フォーラム（NEAEF）が行われ、参加した。

各国持ち回りで開催されるNEAEFは今回、北陸経済連合会創立40周年記念事業として同連合会、北陸AJECらが共同主催した。「環境・エネルギー・物流。協調と循環が未来を開く」をテーマに、寺島実郎氏（㈱三井物産戦略研究所所長・日本総合研究所会長）の基調講演に引き続き、3分野の分科会が行われ、最後に「北陸宣言」が発表された。各報告のパワーポイント資料（PDF版）が今年いっぱい、北陸AJECのホームページ（<http://www.hokkeiren.gr.jp/ajec/>）で公開されているが、以下に私見を交えた概要を報告する。

第1分科会は「環境」。鈴木基之氏（環日本海環境協

力センター理事長・中央環境審議会会長)を座長に、日、中、韓、モから6つの報告があった。中では、銭易氏(精華大学環境科学工学部教授、中国好学院院士)の報告が、中国におけるクリーンプロダクションと循環型経済に関する基本資料として興味深い。分科会ではいくつかの事例報告と提案がなされ、地球環境保全と持続可能な社会活動に対して認識が共有されたが、多国間協力に向けた議論のフォーカスが曖昧だったことや、ロシアの参加がなかったことが残念だった。開催地からは、富山市のLRT(次世代型路面電車)の取り組み、北陸電力による環境への取り組みの報告があった。

第2分科会は「エネルギー」。座長はスティーブ・クーパー氏(アラスカ州元知事)。省エネルギー、温室効果ガス排出削減、原子力発電等を切り口に、日、中、韓、ロ、モから12の報告があり、地元からは若狭湾エネルギー研究センターの事例報告があった。エネルギー生産国ロシアからはハバロフスク地方の参加にとどまり、北東アジアにおけるエネルギーの生産・加工・利用などの協力の枠組みにまで議論が到達できなかったように思われる。中で、張建平氏(中国国家発展改革委員会対外経済研究所国際協力部長)が黒龍江省や吉林省など中国内陸部における省エネルギーと排出削減に関する調査報告を行い、貴重だった。また、北陸地域における原子力発電の経験や安全技術が北東アジアに貢献するという積極論が複数の日本側発表で展開されたが、地震国・日本からの原発に関する発言としては、より慎重な分析と大局的な議論が必要ではあるまいか。

第3分科会は「物流」。栢原英郎氏(日本港湾協会会長)を座長に、経済的ロジスティクスの確立、鉄道と港湾を結ぶサステイナブルなロジスティクスの促進、ミッシングリンク(不連続点)の改善など、日、中、韓、モ、米から9つの報告があった。さらに、北東アジアフェリー航路やシベリア横断鉄道の活用などを通じて、北陸地域が北東アジアのロジスティクスの中核を担う可能性が強調された。

総括セッションでは、3分科会に加えて、2007年7月に中国・天津市で行われた北東アジア銀行設立のための第4回専門家会議の報告が行われ、北東アジア金融研究センターを設立するなど同銀行の設立に向けた努力の継続が確認され、最後に「北陸宣言」が合意された。同宣言には、天津市が2008年秋に次回開催を招致し、NEAEFが受諾したことも盛り込まれた。

また、NEAEFの一部として、10月14-27日、富山大学を中心にヤングリーダープログラムが開催され、北東アジア諸国や米国などから32名が参加した。他方、会期中、NEAEFの日本側窓口とも言える「金森委員会」が開かれ

たが、おなじみのメンバーを見るにつけ、北東アジア経済圏に対する関心が、地方でも中央でも広がらないもどかしさを感じた。日本では人材の新陳代謝が遅いようだ。ヤングリーダープログラムへの日本人参加者は、3名だったと聞く。こうした機会を大切に、将来につながる人材が輩出されることを期待したい。